来さのせえ
奥多摩
《第40号》
平成28年1月15日
(一社)奥多摩観光協会

<奥多摩学　栃餅作り>　絵　小岩清水

新年のご挨拶

新年あけましておめでとうございます。旧年中は観光客のみなさまをはじめ、多くの方に観光協会の運営にご協力をいただきまして、ありがとうございました。本年も変わらずよろしくお願い申し上げます。

さて、昨年は奥多摩町第５期長期総合計画スタートの年でした。４期に引き続き５期の観光部門の策定に私は関わらせていただきました。基本的には４期の構想の継続といえると思います。４期の中に「観光ビジョン策定委員会」の設置がありました。私はこの委員会に加わり、これからの奥多摩の観光、そしてそこに何が求められているか等、２年間２２回の会議を約１０名の委員と重ねました。

その結果、出来上がったのが奥多摩２１自治会の生活道をつないだ「山里歩き絵図」です。

私たちは、これからの観光にとって求められているのは、奥多摩に暮らす人々の営み「山村の文化」を抜きにはできない、ということでした。その山村の日常を垣間見て、そこで何かを感じてもらおうと考えたのです。脳学者の養老猛さんが、これからの日本について新聞のアンケートに答えていたのは「日本人はもう一度山村の謙虚な生活を思い出さなければだめだ」でした。

東京都心からわずか５０キロから６０キロの奥多摩、まだまだ山村の謙虚な営みが続いています。多くのお客様が奥多摩を訪れ、元気になってお帰りになることを願っています。今年もお待ちしております。

一般社団法人　奥多摩観光協会

会長　原島　俊二

～とっておきの山歩きガイド～

大塚山（1224.5m）

大塚山から日の出山経由で、ひので三ツ沢つるつる温泉へ降りるコースを紹介します。

青梅線古里駅を出発。万世橋を渡り、丹三郎を過ぎると御岳山大塚山登山口です。長福寺横に整備されたトイレがあり、すぐに獣害防止網を潜るとスギ、ヒノキの針葉樹林帯に入り、どんどん登って行くと、まもなく１本はサワラ、２本はスギの「飯盛杉」に着きます。集落では冠婚葬祭に飯をテンコ盛りにする習わしがあり、飯盛杉にも高盛の飯を供える習慣がありました。これを破ると枯れてしまうという言い伝えが残っています。

ここを過ぎると落葉広葉樹の丹三郎尾根。カエデ、エノキ、オトコヨウゾメ、リョウブなどを見ながら登ると、大塚山が目の前にあらわれます。
この辺は10月に入ると紅葉の見頃を迎えます。
山頂は明るくベンチもあり、昼食に最適。休憩後は御岳山御師住宅・馬場家の前を通り、神代ケヤキを見ながら道標に従って日の出山への道に入ります。

緩やかな道を行くと右へ養沢鍾乳洞、金毘羅尾根への道を分け、急な登りにかかり、木段の急登を越えると左上に東雲山荘が見えてきます。日の出山は目の前です。

山頂からの展望は見事で、大気が澄んだ日はスカイツリー、奥多摩や丹沢、秩父の山々、富士山も眺めることができます。

下山は南端の急坂を慎重に降り、ひので三ツ沢つるつる温泉への分岐を確認し、顎掛岩で一休み。植林の中をぐんぐんと高度を下げ、東雲山荘の作業道に続く道が見えると祠の横が林道です。

三ツ沢の人家を過ぎＴ字路を左折、少し上った所に、ひので三ツ沢つるつる温泉があります。ゆっくり疲れを癒したら、温泉前から武蔵五日市駅行のバスが発車します。

●参考タイム（分）

古里駅…(10)…御岳山大塚山登山口…(3)…長福寺（トイレ）…(20)…大平…(30)…大久保…(20)…飯盛杉…（5)…丹三郎尾根…(60)…大塚山…(15)…日の出分岐…(60)…日の出山…(20)…顎掛岩…(60)…ひので三ツ沢つるつる温泉

●ひので三ツ沢つるつる温泉　第３火曜日休館

（中里 與志江）

奥多摩湖・水と緑のふれあい館一周記

奥多摩むかしみち歩きの始点・終点施設として、多くの方々に利用されています。“トイレしか入ったことがない”という方のためのおすすめガイドです。

右回りでも左回りでも足の向くまま歩いてみてください。湖底に沈んだ小河内村にあった馬頭観音や道祖神などの石造物27点ほどが屋外展示されていますので、いくつかを紹介します。

① 日食供養塔（寛政１１年・1799）

江戸時代、村の人々は日食をどのように見たのでしょうか。天変地異や作物の凶作を恐れて供養したようです。２７名の名前が刻まれています。

② 温泉場の「灯明台」（嘉永７年・1854）

江戸町火消“い組”の頭領が小河内温泉に奉納したもので露天風呂の近くにあり、かつては鉄製の火袋が乗せてありました。

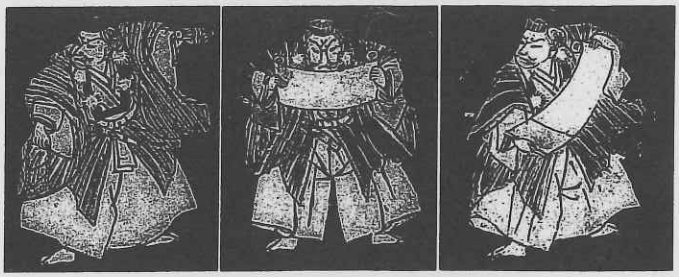
③ 六地蔵

家形の中に六体のお地蔵さんが並んでいます。この形式は山梨県東部から檜原村や小河内地区で見られます。七体並んでいても七地蔵とは言いません。真ん中にいるのは阿弥陀さんです。

④ 松尾芭蕉句碑

「山中や菊は手折らぬ温泉の匂ひ」とあり、以前は、温泉神社にあったものですが、芭蕉が小河内温泉に来た記録はありません。もしかしたら、北原白秋のようにお忍びで来たのかも？

●最後に館内展示の「写し絵」をご覧ください



江戸時代に日本人が発明した映像関係の貴重な文化遺産です。幻燈から映画への過渡期、石油ランプを光源にした「写し絵」を映画のメッカ・ハリウッドが注目したそうです。当時、村では娯楽として車人形や写し絵などの高い文化を楽しんでいた様子がうかがえます。　（岡崎 学）

～ 車人形の教室からこんにちは ～

奥多摩にお越しの皆さん、こんにちは。
私たちは、「川野車人形子供教室」の生徒とスタッフです。この教室は誕生して１２年、前身の「小河内小学校総合学習・伝統芸能川野車人形」の取り組みも合わせると実に１４年もの歴史を重ねています。

この間、毎年上演する３月５日の定期公演のほか、小河内小中学校合同学習発表会や氷川小学校学芸会、小河内小中学校閉校式典、「山のふるさと村」の野外舞台や「水と緑のふれあい館」のエントランスホールにおける特別公演など、本当に数多くの舞台発表を経験してきました。

平成２４年度（２０１２年度）には、関東ブロック代表として、町や都の推薦を受けて「第１４回全国こども民族芸能大会」という大きな舞台にも出演したのです。　すごいでしょう！
この舞台発表本番の経験と、そのための人形師としての稽古の積み重ねが、子供たちの人形遣いの技術を少しずつ少しずつ向上させているのです。講師となる保存会の皆さんからは、少しの注意と、いっぱいの褒め言葉のシャワーをいただいてきました。
また、保護者のみなさんにも、稽古の送迎や毎回の反省会の準備、衣装や小道具の準備などで大変お世話になっています。

文科省の伝統文化協会からは、ろくろ車（箱車）の整備等大きな支援をいただきました。奥多摩町教育委員会や社会教育委員の皆さんからは、教育奨励の賞をいただいたり、「子供教室」の取り組みを西多摩地域全体に紹介していただいたりと、本当に温かく見守られているし、町社会福祉協議会からも、教室運営を支援していただいています。

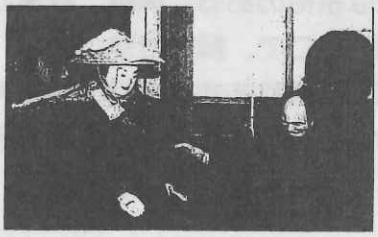
「川野車人形子ども教室」は、このように地域、保護者、そして奥多摩を訪れる多くのみなさんに　愛され、支えられています。

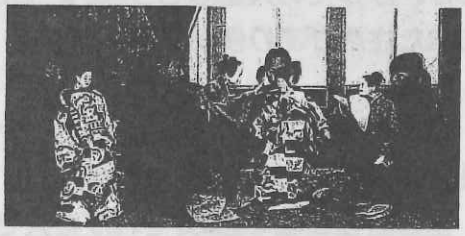
今年もまた、３月５日には定期公演を、３月中旬には特別公演を予定しています。年が明けて１月の第２週からは、定期公演の舞台にもなり毎回の稽古場ともなる「川野生活館」に子供教室の生徒たちが足を運びます。

子供たちの十八番は「東山桜草子当吾子別れの段」「東山桜草子甚平渡し場の段」「日向景清一代記獄舎破りの段」「日向景清一代記人丸姫道行の段」「東海道中膝栗毛赤坂並木の段」、以上の五段。

さて、今年はどの「段もの（演目）」に、どの「車人形」に出会えるでしょうか。「川野生活館」の定期公演か、「水と緑のふれあい館」の特別講演でお会いしましょう。可愛いちびっこ人形師たちと心を込めてお待ちしています。

川野車人形子ども教室代表　武本　正明





～行ってきたぁよ～

杣人が歩いた　峠を　訪ねる

里と山と谷。奥多摩は、この３つでできている。里から移動するときはかならず山か谷を越える。ふつう登山者が山頂を目標とするのに対し、山間の生活者は頂上まで登らず、なるべく標高の低いところを使って山を越える。そこが峠だ。

杣人（そまびと）とは、木材などを調達・販売する、薪や炭を燃料としていた時代の重要な職業で、林業やワサビ栽培でいまも生活と山とが密着している奥多摩では、親しみある存在である。

奥多摩町の海沢と青梅市の御嶽山をむすぶ道に大楢峠があり、そこから尾根沿いを 1km 北上したところに「小楢峠」と表記のある地図が存在する（吉備人出版『奥多摩東部登山詳細図』守屋益男 2011）。一般的に、峠は尾根越えの道であるか、尾根沿いの道どうしの交差点であるのだが、地図にある小楢峠は城山尾根上に名前の記載があるだけで、ほかの登山道と交差していない。

10 月 20 日、じっさいに小楢峠を歩いた。海沢から城山尾根まで登り、大楢峠（大楢峠の名の由来の巨樹は今年９月に倒壊。）で昼食をとる。1km 北上して小楢峠に着く。コナラとケヤキの巨樹が目印で、よく探すと祠と小さな看板もある。さらに、地図にはないが東側に道があるように見え、それを進めば越沢（こいざわ）という集落跡に至るはずで、峠から続くその道を下ってみる。

やはり、道なき道だった。ガイドの地元の方と進むと、ケヤキの巨樹（幹回り 5.8m）と祠を見つけやっと人の往来の痕跡を発見する。祠の周囲に散らばるガレキから考えると、かつて社が建っていたようだ。その先も道らしきものはほぼないものの、やがて越沢林道に合流し、ついに集落に出る。越沢集落跡には神社の建物と貴重な石碑類がよく残っているが、かつての人家はもうない。しかし、新しく作られた住居があり住民が１人いる。

里、山、谷、の字にニンベンをつけてみる。俚、仙、俗。標高の順に意味がかわる。

里と山をつなぐもの、それが杣人であり峠である。その道はまだ、奥多摩にある。　（伊藤 英人）

檜原村から小河内峠を越えて御前山

11 月６日、快晴、参加者 32 名、ガイド７名、総勢 39 名です。

JR 武蔵五日市駅 7:43 発藤倉行きバス（増発）に全員座って乗車、藤原で準備体操の後、8:40 登山開始。すぐに春日神社、神社にある杉は、村指定天然記念物。目通り周囲 5.6m 高さ 40m、通称「小杉」と呼ばれ、大杉と呼ばれた親杉は枯れて伐り倒されたが、その切り口は畳六畳ほどの広さであったとか。国指定重要文化財・小林家住宅（茅葺の古民家）を経由します。村の教育委員会が管理する施設で、風呂（五右衛門）、トイレ（洋式）あり、寝具や食事は無しの宿泊ができます。

9:45 小林家を後に小河内峠への山道へ合流し、陣馬尾根を歩きます。昔の峠越えの道だけあって、急な坂もなく、なだらかな歩き易い道です。また左右の林は黄、紅葉している落葉樹で、おまけに富士山も見られて、気持ちはルンルンになります。途中に 7～8 千年前の中ノ平遺跡（縦穴式住居跡）もあり、出土土器は資料館に展示されています。小休止を入れておよそ 90 分、11 時過ぎ小河内峠に到着、立ち休憩の後、直ぐに惣岳山へ向います。途中にあるソーヤノマルデッコは登らず、巻道を行きます。12:15 惣岳山到着、此処で昼食です。12:40 最終目的地御前山へ向かいます。

13:00 御前山到着。周囲の山の説明もそこそこに 13:10 境橋へ向かって下山開始。この辺りは登山道に沿って、太い杭に丈夫なロープが張られ、カタクリの群生を守っています。御前山避難小屋で、トイレ休憩。ここに湧き出る水は、生で飲めないと言われるけれど、流れに沿ったこの辺り一帯、見事な“シモバシラ”が見られる処です。谷沿いに黄葉した灌木の下、ひたすら下ります。14:20 体験の森・栃寄広場へ到着。栃寄沢に沿って歩くこと１時間、15 時過ぎ、バスの時刻には余裕のある“境橋”到着です。全員無事登頂下山。ここで、解散です。

予定の 16:19 のバスに乗ります。余裕のある人は「境橋」から“むかしみち”を奥多摩駅まで歩きます。　（西原 潤治）

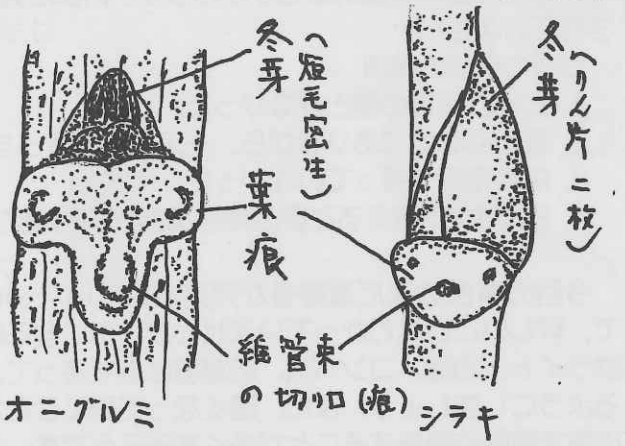
奥多摩樹木雑考

“山よそおう”から“山眠る”へ

この季節、森は芳ばしい香りをほのかに漂わせながら静まりかえっています。ほとんど葉を落とし、楚々として立たずむ木々に顔を近づけてみると、眠りに落ちた木々の美しさやおもしろさにふれることができます。

まず目にとまるのが、ふくらみをたたえた冬芽です。“冬芽”とはいっても、枝の先端の芽（頂芽）はすでに夏の間に、葉が落ちたあとにできている芽（側芽）は秋の間にできています。図はオニグルミとシラキの側芽と、葉が落ちたあとにできた葉痕を示しています。葉痕には水や養分を通していた管（維管束）の切り口がおもしろい表情をみせています。それぞれ、羊の顔やあどけない幼児の顔に見えますね。

また冬芽は毛やりん片で表面をおおい、冬の乾そ



うから身を守っていますし、細胞液は不凍液です。

物理学者寺田寅彦の「自然はいくら近づいてみても、その美しさを失うことはない」という言葉に「おもしろさも失うことはない」とそえてみました。

冬の野山で、なかなか枯れ葉を落とさない樹木があります。コナラ、ミズナラ、カシワなどブナ科の樹木に多いのですが、ヤマコウバシ（クスノキ科）の枯れ葉も目立ちます。これらの樹木もやがて冬芽の生長に押し出されるように葉を落としていくのですが、これらの樹木の枯れ葉は、冬芽を寒風から守っているのだという人もいます。はたしてそうでしょうか。すでにふれましたように、冬芽はしたたかに乾そうや寒さから身を守るつくりをもっています。

自分が観察したことをもとに、安易に自然を解釈をすることはさけたいと思います。

（橋上　一彦）

奥多摩の野鳥

“奥多摩の冬の鳥”

夏鳥たちが、南へ帰って行くと入れ替わるように北方から冬鳥たちがやって来ます。

ツグミ、アトリ、ジョウビタキ、カシラダカ、ヒレンジャク、キレンジャク、マヒワ、など。

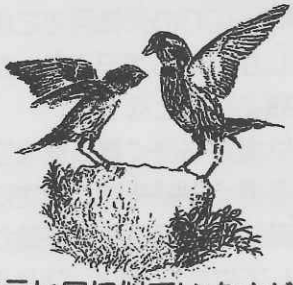
また初夏から夏６月頃にかけて、山で子育てに励んでいた鳥たちが低山や里におりてきます。

ホオジロ、アオジ、ルリビタキ、イカル、ウグイス、クロジ、など。そして、シジュウカラ、エナガ、メジロ、カワラヒワ、ヤマガラ、ヒヨドリ、スズメ、など、里山に一年中とどまっている留鳥など奥多摩の里山で集結し、大いににぎやかになります。

落葉樹の葉が落ち鳥たちが見つけやすくなるこの時期、野鳥を観察するには最良のシーズン到来です。

さあ、双眼鏡を手に里山へ出かけましょう！きっとかわいい鳥たちに出合えるでしょう。

さて、今回は冬鳥のマヒワを取り上げたいと思います。マヒワ：全長約 12.5 ㎝ぐらいで、スズメより少し小さく、頭頂部は黒く（メスは灰黄色）胸腹部は黄色で下部は白い、ジュイーン、ジュインと鳴きながら集団で移動する。多い時は数十羽以上で…。



大澤新次　画

留鳥のカワラヒワに似ていますがカワラヒワより黄色部分が目立ち、くちばしが灰色でカワラヒワは肉色をしています。草の種や、スギ類の種、花芽などをよく食べます。エナガ、ヒガラ、シジュウカラ、などといっしょに移動することもあります。これは冬によく見られる現象で、小さい鳥たちが種をまたいで混群となり、行動をともにする事で大型のワシ、タカ等の猛禽類などから身をまもるためと考えられています。

春４月頃に北へ帰って行きます。スズメより小さい体で渡りのために命がけで数千キロの距離を移動する。この小さい体のどこにそのような力を秘めているのか、野鳥のマヒワとはすばらしい生き物だと思います。

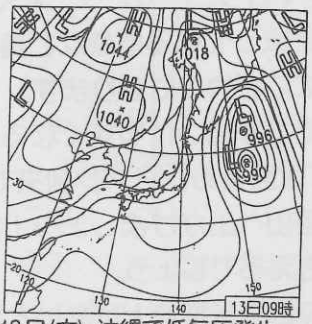
（畑　幸夫）

早春の奥多摩山歩き
～ワンポイントアドバイス～

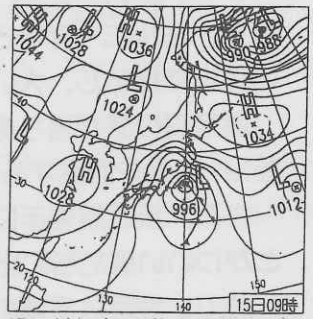
『秩父多摩甲斐国立公園』東の玄関口奥多摩は、首都圏からのアクセスも良く、電車が到着するたび、駅前に沢山の人々が降り立つ。繁忙期には、案内所の臨時窓口を設け我々も対応に当たっている。
中には雨具や弁当を持たず登る山を決めかねている登山者もいる。

今回は、平成26年2月に豪雪をもたらした早春の天気について振り返ってみたい。

（気象庁/日々の天気図より抜粋）



13日(木) 沖縄で低気圧発生
気圧の谷の影響で、沖縄～西日本は曇りや雨。夜に沖縄の南で低気圧発生。北日本では冬型の気圧配置となり、日本海側で雪や雨。九州では最高気温が平年より6℃以上低い所も。



15日(土) 太平洋側で記録的大雪
低気圧の発達に伴い関東甲信を中心に大雪。最深積雪は甲府114㎝、前橋73㎝、熊谷62㎝など甲信～東北の15地点で観測史上1位を更新。東京都千代田区も27㎝の積雪。

左は13日（木）9:00の天気図でこのとき奥多摩では昼頃に日差しが見える状況であった。その翌々日朝には記録に残る豪雪となった。

早春の雪山は展望も良く真っ青な空のもとヴァージン・スノーを歩く醍醐味は、何物にも代え難い。しかし、その裏には天候急変の危険がはらんでいることを見落としてはならない。ひとくちに奥多摩の山歩きといっても、裏山から2,000m級の雲取山に至るまでそのグレードは千差万別である。平地は雨でも山は雪の場合が多い。

地形図同様天気図とも仲良しになりこれから登る山で今から何が起こるかについて考察を試みる視点が欲しい。毎年、12月～1月中旬に多い西高東低の冬型気圧配置では、降る雪の量もさほど多くない。一方、1月下旬～3月上旬にかけて急速に発達する低気圧が本邦南岸を通過する際、上記程ではないにしても奥多摩の山々に大雪をもたらすことが多い。

入山域の最新情報・気象情報の入手は勿論、冬の単独登山は自重し、その山を熟知した経験者と同行されたい。魅力に危険がつきものであることを肝に銘じて山歩きを楽しまれたい。　（冨士　光男）

山岳遭難救助事例

この遭難事例は青梅警察署管内で発生した山岳遭難救助を伴った事例を報告するものです。登山するときに参考にして事故を起こさないように注意しましょう。

平成27年10月13日　57歳女性 登山初心者
3ヶ月ぐらい前から山に登りはじめ、すっかり山の魅力に取りつかれた。

家族には川苔山、本仁田山方面に行くとだけ言い、具体的なルートは伝えていなかった。また、登山計画書も提出されていなかった。警察の捜査により奥多摩駅に着いたのが午前10時過ぎ、駅から鍾乳洞行のバスに乗り川乗橋についたのが10時28分、ここまでは確認された。

家族が、帰ってこないので翌日未明、警察に連絡、捜索開始 滑落しそうな現場を中心に捜索したが発見できなかった。

5日間の懸命な捜索にもかかわらず、いまだ発見されていません。

今回の事故の教訓

1. 登山計画書の提出がなかった。
2. 登山初心者でありながら、一人で山に登った。
3. 携帯電話を持っていなかった。
4. 日没時間を考えると登山開始の時間が遅すぎた。

今回の事例はまだ遭難者が発見されていないので、詳しいことはわかっていませんが、山に登る時はライト、地図、コンパス、防寒着は必ず持って入るようにしましょう。また、暗くなって動くことが出来ず救助依頼をすることが多くあるそうです。そのためにも日没時間の2時間前には広い道路まで下山出来る様な、無理のない計画が大切です。

平成28年度

登山・ハイキング会員募集

奥多摩観光協会では、当協会が主催するイベントの参加者を募集しています。

28年度会費1,000円で、5回参加すれば、奥多摩温泉「もえぎの湯」の無料券（入湯税50円は個人払い）をプレゼントします。但し、各回参加費700円。会員登録は郵送、FAXでも手続きができます。詳しくはJR奥多摩駅前にある観光案内所にお問い合わせください。

次号発行予定：平成28年4月15日

発行	一般社団法人　奥多摩観光協会
住所	〒198-0212　奥多摩町　氷川　210
電話	0428-83-2152　Fax0428-83-2789
編集	名人・達人観光ガイドの会